

// 卷頭言 //

日本ライトハウス理事長
木塚泰弘

「欧米モデルによる職業生活訓練の我が国への本格的な導入」

1954（昭和29）年当時の岩橋英行常務理事は、日盲連事務局長として鳥居篤治郎副会長と共に世界盲人福祉協議会（世盲協、WCWB）の第1回総会（パリ）などに出席するかたわら、約2ヶ月にわたって欧洲各国の関係施設を視察した。帰国の約1ヶ月後、日本ライトハウスの創業者かつ、日本盲人会連合（日盲連）と日本盲人社会福祉施設協議会（日盲社協）の創立者で、両者の初代代表も兼務した岩橋武夫初代理事長が、第1回のアジア盲人福祉會議の開催準備の奔走で、持病の喘息をこじらせて亡くなった。

第1回のアジア盲人福祉會議は、「開催のめどが立った」と、武夫理事長が亡くなる直前に電話した厚生省の松本厚生課長らの尽力で、翌年の1955（昭和30）年10月東京で開催された。父親の遺志を継いだ英行第2代理事長は、明子夫人と共に会議の成功に向けて奮闘した。翌1956（昭和31）年英行理事長は日盲連の鳥居会長と共に、インド政府開催の盲人職業教育セミナーに出席したが、その後、世盲協実行委員会、第2回アジア盲人福祉會議などに際しても、アジア各国の実状を視察した。

1964（昭和39）年の世盲協第3回総会（ニューヨーク）で、世盲協副会長とアジア委員会委員長に、岩橋英行理事長が長年の実績をかわされて選ばれ、その後20年間再任され、次期会長と見なされる存在であった。ところで、そのように世界的視野を持つ英行理事長は、世盲協第3回総会の折り、ニューヨークで、アメリカの職業生活訓練の理念と実状に強く心を動かされ、我が国の実状との落差に愕然としたのである。

翌年の1965（昭和40）年日本ライトハウスに職業・生活訓練センターを

設立し、AFOB（現ヘレン・ケラー・インターナショナル）のジマーマン氏を1958（昭和33）年までコンサルタントに迎え、本格的な職業生活訓練（社会・職業リハビリテーション）を日本で初めて導入し、苦心を重ねて定着させた。あたかも1965（昭和40）年は、ILOの障害者の職業リハビリテーションに関する宣言が採択された年でもある。

最初は視覚障害者への独自事業として、通所の生活訓練から始めた。しかしながら、翌年の1966（昭和41）年には、第1種事業失明者更正施設（現、視覚障害者更正施設）として認可された。1967（昭和42）年にはミシン部品工場に2名、1968（昭和43）年に電話交換手1名、1971（昭和46）年にプログラマー1名と、各職種の第1号を就職させていった。

ジマーマン氏がコンサルタントを辞した後には、マレーシアで行われるようになったAFOBの歩行指導者養成講座で職員を研修させた。1970（昭和45）年には、AFOBの協力を得て、日本ライトハウスで歩行指導員養成講習会を開催した。また、同年文部省と大阪府教育委員会の共催で、日本ライトハウスに委託された養護・訓練担当教諭講習会も開催された。私は前者には講師として、後者には講師と受講生を兼ねて参加したが、両講習会とも熱氣にあふれており、社会リハビリテーションや養護・訓練（現、自立活動）の初期の強力なリーダーが巣立ったのを忘れることがない。

その後、厚生省（現、厚生労働省）の委託で、歩行指導者やリハビリテーション指導者の養成が30年にわたって継続されている。また、文部科学省と全国盲学校長会の後援で、主に、盲学校教員を対象とした教育関係者視覚障害リハビリテーション研修会も行われている。社会リハビリテーションの指導者の必要性が増す中で、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院の1年制の指導者養成が、10年を経て1999（平成11）年から2年制となった。日本ライトハウス（養成部）でも、2001（平成13）年から在職研修を意識して、通信教育を加えた2年制に踏み切った。

岩橋英行理事長がまいた種が大きく育ち、今後地域福祉の生活訓練等事業や相談事業の中核的扱い手となることを期待したい。